

〈随想〉マラルメの墓

立石, 伯 / TATEISHI, Haku

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

35

(開始ページ / Start Page)

100

(終了ページ / End Page)

101

(発行年 / Year)

1986-12-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019477>

マラルメの墓

遂に永遠が彼を彼自身に変貌させるように、

詩人は拔身の剣をもって出現させる

恐怖にあわてふためく彼の世紀を

その未知の声のうちに死が勝利したのを知り得なくて！

ステファヌ・マラルメの「エドガー・ポオの墓」は、ポオを深く愛した詩人のオマージュにほかならないが、右はそのソンネ第一聯の拙い試訳である。私はボードレー、ランボオ、ヴェルレーヌ等とともに、マラルメを青年時より畏敬、偏愛して、何かの機会にその墓に詣りたいものだとしそかに念願しつづけてきた。

ランボオの墓はアルデンヌ県シャルルヴィルにあること、ヴェルレーヌのそれはバチニョル墓地にあること（残念ながら今回詣でること叶わず）、ボードレーのそれは、永井荷風が「墓詣」で「南の墓地はモンパルナスと呼びて、モオパッサンの眠る処、又ポオドレエルの墳墓のみならず『悪の花』の記念碑もあれば、夙に詣で

立石 伯

知る処たり」云々と印象深い文章を残しているので分明のことであった。もとより、パリ生れのマラルメの墓はパリ三大墓地のいずれかにあるだろうと高を括って、渡航前に年譜を調べ直さなかった。また、シャルルヴィルに行く前に、ランボオ全集の年譜を書店で念の為調べてみると、死去の年月日と時間の記述のみで、墳墓の場所などに触れぬままなので、プレイヤッド叢書の多くはこの体裁だろうと早合点した。二重のこの早合点で、三大墓地にマラルメの墓を見出しえなかった後にパリのあちこちを走り回る原因となった。そして遂に手段がなくなり、マラルメ全集をのぞくと、次の記述があった。年譜終りの一八九八年の頃に「五月十日、ボラール画廊でオディロン・ルドンの展覧会。九月九日、ヴァルヴァンにて、ステファヌ・マラルメ死去。九月十一日、サモロー墓地（セーヌ・エ・マルヌ）に詩人の埋葬」の数行である。さて、サモロー墓地とは何処なのか、何故聞き慣れぬこの墓地に埋葬されているのか。ヴァルヴァンは彼が好んで過したパリ近〇の田舎町だと知っていたが、ヴァ

アルヴァンとサモローがどうしても結びつかないのである。

かつてヴァレリイは、詩句の音楽的爆発、言語表現の全体系の支配等とマラルメ詩の核心を語り、完璧という觀念の証人ないし殉教者に詩人を擬した。彼はマラルメと数度、そして死の数ヶ月前にもヴァルヴァンで会っている。もとよりその葬儀にも列している。どうもヴァルヴァンとサモローは地理上近い関係にあるらしいと推定して、黄ばみ始めたマロニエの並木道を後にして、リヨン駅から深い森のフォンテーヌブローに足を向ける。フランス人のひどい不親切には最早慣れきっているが、どうにか五六杆ほどの距離のサモローの方角を知る。

田舎の道を三四杆歩くも時折自動車がかすめすぎるだけで、行き合う人は僅か一人。果して正確な道を辿っているか少し不安になった頃、セーヌ河にかかる。兩岸にはこんもりと樹木が茂りその中に別荘らしい建物が点在し、処々には船が舫っていて、橋上からの眺めに深い安らぎをもたらされる。橋を渡りきると、マラルメ河岸という青い標示板が目につく。彼が帆船を浮かべたのはこの辺かもしれぬと空想すると感慨殊の外深い。さらに運よく町の略図板を見出し、教会と墓地の位置を確かめる。教会には人影なく、狭い田舎道にも人影まばら。墓地に向けて暫く道をとると家並がきれ、畑が拡がる。ここで又不安がこうじる。見渡すと遠くの畑の中に墓地らしい在扉で囲われた一画が目にとまる。門をくぐると、幸いにも老人一人墓の手入れに余念がない。マラルメの墓を知らないか訊いてみると知らないという。ここはサモロー墓地かと確かめるとそうだといい。一ヶ月半ほど前テュービンゲンの広大な中央墓地でヘルダー

リンの墓を探し出すのに苦勞したのが一瞬頭をかすめたが、この墓地は狭いので一つ一つ名前を読みはじめた。

数分もかからないで見出すことのできた墓は、ギリシャ風の壺を戴いた円柱の風雅なものであった。一番上に早世した子息アナトール、次に本人のステファヌ、その下に妻のマリー、下段に娘のジュヌヴィエーヴの名が刻みこまれている。参る人が少ないのか、生花がない。かつての詩王の墓としてこの有様に慨嘆すべきや否や。ある慰藉は、愛娘のジュヌヴィエーヴが夫ボニオ再婚の故か家族とともに埋葬されている事である。孤独、狷介な詩人には相応しいかもしれない。墓は林の彼方に流れるセーヌ河に向きあっているの、彼らはひそやかな水音、帆のはらむ風のうなりを聴きつづけているのであろうか。

私は「エロディヤード」「イジチュール」を殊に好むが、孤独、驕慢であり、未知なる謎を渴望し、偶然、真の夜、絶対、無限、さらには有用な狂気に深く思いをはせたマラルメは、それらの詩句のうち彼の姿を書きこんだのかもしれない。そして、その晩年に完成し、死の直前までルドン挿画の豪華版の為に校正しつづけた『骰子一擲』の楽符に近似した言葉の完璧な配置に精神を費消し、その死を早めたのかもしれない。詩人内面のこうした厳しい消息を窺知していたヴァレリイが、マラルメ葬儀の折に一言も発し得なかったのはけだし当然であろう。マラルメは詩集の中に身を隠し、遂にはそこから姿を消し去っているようにみえる。この詩人は、へ永遠と無限Vによって彼自身に容貌させられてしまった憑かれた言葉を唯一の友とする単独者であったに違いない。

(文学部教授)